

# 桶川市「もうひとつの紅花の郷」を旅して

佐藤亜希子  
渡邊 毅巳

## 桶川と紅花

紅花といえ、山形。特に山形県民は、その感を強く持っています。しかし、紅花といえ、山形と並ぶほどに埼玉県桶川市も忘れてはなりません。

桶川市は埼玉県の中央に位置しており、人口は七万四千五百一人、面積は二五・二六平方キロメートルの市です。桶川は、江戸から十里、現在でいうと四十キロの距離に位置して、江戸時代には五街道の一つ中山道の五番目の宿場町として栄えていました。

また、桶川は農作物の集散地でありましたが、天明・寛政年間（一七八〇〜一八〇一年）に江戸商人が最上紅花の種をもたらしたことから紅花栽培が始まり、桶川の紅花は「桶川臘脂（おけがわえんじ）」の名で全国に知られるようになりました。幕末には桶川は、山形の「最上紅花」に次

いで全国で二番目の生産量を誇っていました。

紅花の収穫時期は、最上地方では七月に行うのに対して、氣候が温和な桶川では一足早い六月に行うことができます。そのため桶川の紅花は、早庭（場）（はやばもの）とも呼ばれ、紅花商人に歓迎されたそうです。栽培された紅花は、山形からは京都方面へ運ばれていくのに対して、桶川からは江戸に運ばれて主に染料として利用されました。

山形の紅花同様、桶川の紅花も明治時代の合成染料の出現に伴い、次第に衰退して姿を消していつてしまいました。平成五年、桶川市長に就任した上原栄一氏は、町おこしとして「紅花の里作り」事業（後に「べに花の郷づくり」に着手し、主に切り花とした紅花栽培や味に定評のある店に紅花を使った料理をお願いするなど普及活動に努めてきました。以来桶川市では、紅花をシンボルにした町づくりが行なわれています。今回我々は、その桶川市における紅花の調査を行うため、二泊三日の調査旅行に行つてまいり

ました。

四月十五日（月曜日）

酒田駅から特急いなほに乗り、新潟から上越新幹線に乗り換え大宮、更に高崎線一〇分程で桶川駅に到着しました。桶川市の駅は「町おこし」という言葉から受ける印象とは違い、思いのほか大きいものでした。諸事情により、荷物を持ったまま到着早々市内を歩き回ることになるのですが、駅から西口を出るとすぐに目に入ってくるのが大きなビルの看板でした。そこからしばらくして大きな公園を通り過ぎ、次に広大な団地を横切りました。

後に聞いたところによると、桶川駅の西側は、工業団地をニュータウンに改造したため、近代的に発展しているということでした。その反面、東側は古びた情緒のある町並みでした。東口から細い商店街を通り過ぎると旧中山道に着きます。中山道沿いに今回の旅の宿、「武村旅館」があります。

「武村旅館」は、江戸時代末期に三十六軒あつた中山道桶川宿の旅籠屋のうち「紙屋半次郎の旅籠」にあたる登録有形文化財（建造物）で、江戸時代当時の旅籠の姿を残す貴重な建物であります。木造二階建てで、遠くからでも見ることができ大きな「旅館」の看板がたててありました。頭をかがめて入り口をくぐると大きな玄関の中に神棚があ

り、奥の方に良い色の赤いじゅうたんがつかっていました。残念ながら増改築が進んでいるために客間は普通のビジネスホテルのようでした。女将さんは、昔からの建造物を維持することが非常に難しいことを話されていました。

四月十六日（火曜日）

朝九時、事前に酒田から予約を取り付けてあつた桶川市役所市民生活部産業観光課を訪れました。

桶川市では、現在、市から紅花栽培を委託された農家や平成七年に設立された紅花生産組合などはたらきにより、紅花栽培が定着してきています。平成九年の作付面積は、埼玉県では、三・六ヘクタールに対して山形県では四・一ヘクタールでした。しかし、生産ルートはまだ少なく、需要も少ないことから紅花を産業に結びつけて県外に発信することが難しく、その点が今後の課題であるようでした。

また、市役所の方には、花遊茶という紅花茶をダースいただいて武村旅館に届けていただきました。花遊茶は紅花がブレンドしてあるお茶で、香り、味共にこれだけ紅花の特徴が残っている飲料はないと言うくらいとても紅花の印象の強いお茶でした。残念ながら、現在生産中止で、今残っている在庫がなくなり次第姿を消してしまうそうです。紅花を産業に結びつけることへの難しさを感じました。

その後、役所の方に古くから桶川市で紅花栽培をおこ



桶川の紅花復興のきっかけとも言える稲荷神社の石灯籠。「紅花商人中」の文字と、その下段には紅花商人達の名が刻まれています。

なつてきた加藤貴一さんを紹介していただきました。そして、ご好意により加藤さん宅まで送っていただいたのですが、その途中、今年の紅花畑をあちこちまわって見せていただきました。三月末〜四月始めと山形県とほぼ同時期に種まきが行われた桶川市の紅花畑は、点在していましたが、一部マルチ（給水装置）が設置されていたりと、盛んに紅花栽培をしているという印象を受けました。

加藤貴一さんは、町おこし事業以前から紅花栽培を続けてこられた方です。加藤さんは、中山道沿いにある稲荷神社の石灯籠に「紅花商人中」として、多くの紅花商人の名が刻まれているのを見たとをきっかけに、桶川と紅花との関わりを調べ始めたそうです。すると、江戸時代に桶川

でも紅花が栽培されており、幕末には最上（山形県）に次ぐ産地として知られていたことが明らかになりました。

それから山形を訪れるなど更に調査を続けていくうちに紅花に魅せられた加藤さんは、以後三十年紅花栽培に着手することになりました。現在は年齢のこともあり、紅花を畑では栽培していませんが、庭にある十個の鉢の中に芽を出した紅花を、とても大切に育てていらつしやいました。また、加藤さんが紅花についてこれまで調べられたことをまとめた一冊の本をいただきました。（注）

加藤さん宅から歩いてべに花ふるさと館に向かいました。そこには、桶川市で作っている紅花を用いた商品が陳列しており、紅花饅頭などの紅花を用いた菓子や染物など、多くのものが販売されていました。

桶川市には、どこで乗っつてどこで降りても百円の西循環と東循環の市内巡回バスがあります。残念なことに一時間に一本ペースの運行なので、良いバスがなく、べに花ふるさと館から桶川駅まで歩くことになりました。そのおかげで、桶川市の中山道の端から端までを歩くことができました。中山道は今では交通量の多い道になってしまいましたが、それでも道からちよつと中に入ると今でも多くの昔の名残がありました。

それから、昨晚約束を取り付けた紅花を使つたうどんのお店「越後屋」に向かいました。「越後屋」は、べに花の

郷づくり事業をはじめるにあたり、市から紅花を使った料理を作つてほしいと依頼された店の一つです。ご主人の吉田さんは、紅花をうどんに加える際に、独特の臭みを取るのに定期的に水を取り替えながら二日間水にさらすのだそうです。紅花の花びら自体には味は無いのですが、うどんに練りこまれた花びらの紅色が、食べる者の目を楽しませてくれるそうです。残念ながら、季節限定のために紅花うどんを食することはできませんでした。

次に、和菓子屋「なか郷」にむかいました。「なか郷」では、「紅花路」という紅花を使ったお饅頭を作っています。このお饅頭もまた、べに花の郷づくり事業の際に、市から依頼を受けて誕生しました。「紅花路」は、ご主人の美味しいうちに食して欲しいという願いから、注文を受けてから作り始めるというこだわりのあるお菓子です。私達も早速予約して買いに行きました。駅から西循環バスに乗つて、下日出谷下車後、歩いて十五分のところにありました。

「紅花路」の皮は、紅花のきれいな黄色をしていました。店のご主人は、饅頭の皮に用いる大和芋や、餡の材料となる白小豆、そして中に入っている栗に至るまで全ての材料を厳選して作つておられるそうです。私達は幸運なことに、できたてのあたたかいお饅頭を食べることができました。本当に美味しかったです。後にお土産に購入した「なか郷」の紅花羊羹は、ちょうど良い甘さの美味しい羊羹で、教員

の方々に非常に好評でした。

四月十七日（水曜日）

まずは、紅花商人寄進の石燈籠を見に行きました。この一对の石燈籠は、中山道沿いの桶川稻荷神社にあり、桶川宿の紅花商人の名が刻まれています。江戸時代に隆盛を誇つた紅花の、桶川市に残る唯一の痕跡として、先に述べた加藤貴一さんをはじめ、多くの人や現在の桶川市に影響を与えてきたものです。

その後、富士見ホテル親水公園に向かいました。ここは、第一回桶川市紅花祭の開催地で、桶川市ロータリークラブが山形県河北町から持ち帰った最上紅花の種子から紅花栽培をはじめた場所であります。

先日「なか郷」の店主からお伺いした、親水公園の近くにある紅花を使ったお煎餅を作っている店に向かいました。その煎餅店は「晃彩」という名で、隣接した工場の伊藤製煎工場の社長夫人が、べに花の郷づくり事業に自分も紅花を使つて商品を作り参加し、協力したいという思いから最初は一人ではじめたことでした。紅花煎餅「彩の紅花」は、自ら飼育したうこっけいの卵を使用するなど、より安心な素材を使用して身体に良い煎餅となるように作られています。

社長の紹介により、現ロータリークラブで、当時の紅花

振興に大きく参画した人物のひとりである高橋さんを紹介していただくことができました。夫人が、べに花ふるさと館にお煎餅を配達するということで、ロータリークラブの会合の行われているふるさと館まで車で送つていただきました。その途中、去年は大きな紅花畑があつた川沿いの場所を通つてくれました。残念ながら、その広大な土地には、今年紅花は栽培されていなかったのですが、以前、インターネットで見たことのあつた広大な紅花畑を容易に想像することができました。

べに花ふるさと館に到着すると、早速会議を抜け出した高橋さんとお話することができました。当時、町おこし事業をはじめると、桶川の歴史を調査したところ、かつて桶川市は栽培をはじめとして、紅花と密接に関与していることがわかり、それでは紅花で町おこし事業をはじめようと考えられたのだそうです。

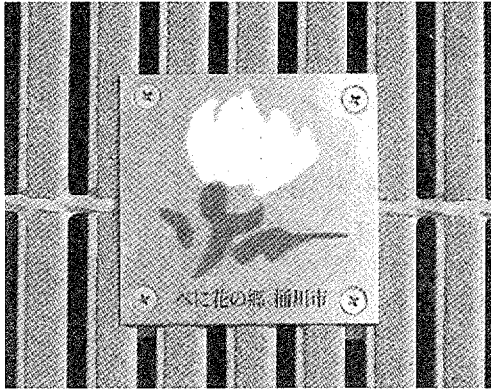
当時高橋さんは、早速山形県河北町を訪れて色々お話を伺つた後、桶川市に種を持ち帰り、富士見ホテル親水公園で自ら試験栽培し、見事な紅花を咲かせたそうです。採集した種子は、市のイベントなどで無料配布され、以後栽培が盛んに行われるようになりました。桶川市では、こうしたロータリークラブのべに花の郷づくり事業の立ち上げから、市民の動きと行政が歩調を合わせて町おこし事業が進んできました。

その後、帰り道のついでということで、次の目的地である歴史民俗資料館まで、夫人に送つていただきました。

資料館では、桶川市に残る当時の紅花農業を知ることのできる資料と、山形県の染物職人鈴木孝男さんの作品、山形県河北町にある紅花資料館にある紅花屏風のレプリカなどが展示されていました。また、当資料館の別棟には、紅花染めなどができる体験コーナーがありました。紅花染めに用いる赤色色素の原料の紅餅は全て、職員の方が資料館付近の畑を借りて栽培した紅花から作っているそうです。早速、畑をみせていただきました。秋時きで前年の十一月に種まきをおこなったことから、すでに間引きも終了し、丈も二〇センチ程度に大きくなっていました。

そこから染物を行っている小島農園（工房まきこ）を訪れました。紅花で染色したピンク、黄色の他に藍の青を加えて独創的な紅花染めの作品を数多く製作されておりました。小島さんは作品について、昔からの紅花染めではなく、日常生活の中に取り入れることのできる色を表現し、生地には麻や綿を用いるなど、桶川市独自の紅花染めをしていると語っていました。

今回の旅行では、桶川の紅花による町おこし事業に様々な形で参加している人々に接し、話を聞くことが出来ました。みなさんに共通して言える事は、自分たちの町を尊く



用水路のふたに、「べに花の郷桶川市」の文字と紅花のマークが施されていました。このようなところからも桶川市の町おこしにかけける熱意を感じることができました。

思っているということです。紅花は食材としても、栽培するにしても、決して扱いやすいものではありません。しかし、市民に行政の「桶川市をべに花の郷に」という思いが伝わり、町全体から、紅花の郷づくりは何とか協力して、桶川市を盛り上げていこうという熱意を感じることが出来ました。

「古くからも、そして現在も、紅花は山形県という印象が強い」とは、桶川市の方々が口々に言われることでした。現実には、山形県において紅花の栽培は減少し、産業に関

しても関連商品の開発などは、桶川市の方に勢いを感じました。しかし、同じ紅花を扱う郷として、決して敵対するわけではなく、それぞれの良い部分を生かしていこうという桶川市民の気持ちが感じられました。

両県に共通することは、紅花が扱いにくいためまだまだ産業の発展に結びつけることは難しいということです。

「紅花は、ピーアールと、ピーアールの裏付けとなるものが足りない」

これは、越後屋のご主人のお話の中で、とても印象深かった一言です。

今後、紅花は、栄養価が高く、有益な健康食品となりえること等に関して研究を進めること、そして、紅花の良い点を広く世間に宣伝することが、研究機関と行政が果たすべきことではないでしょうか。近い将来、桶川市と山形県において、紅花を基にした新しい産業が確立されることを望んでいます。

(東北公益文科大学研究員)

(注) 加藤 貴一・武州桶川べにの花 富士光印刷